
睡蓮の花

睡蓮堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡蓮の花

【Nコード】

N9970Y

【作者名】

睡蓮堂

【あらすじ】

ある日、ある時、ある瞬間。彼女は原因不明の病でこの世を去り、次に目覚めた時に見たのは褐色の肌に赤い髪をした美しき女神・ユーフェリアだった。

ユーフェリアの力によって彼女・冴木漣は異世界ユーフェリアにある国の一つ、黄昏の国ノクティスへと落とされる。輪廻の輪から外れ、転生の軸から外れた彼女の運命は？

世界観、登場人物詳細など

世界観

中世ヨーロッパの街並み酷似した風景の広がる魔法世界。科学という概念がなく、それ故現代世界のような高層ビルや自動車の類が存在せず、科学のすべてが魔法に代替えされたような世界である。また、人間以外の種族が存在し、種族によってその特色が大きく変わる。

国・地域・地名

夜の国
ノクティス ユーフェリアに存在する安らぎと夜の国。一年を通して常に太陽が昇らない国で、日中でも夕暮れのような暗さをしている。

ルーナルーメン・ウルプス《月光の都》 ノクティスの王都。
人口およそ5万人をも抱える大都市であるとともに、王の居城がある王都。

星の海
ステラ・マレ ナイトレイン王家の別城が避暑地。高原の一画に建てられた石造りの城で、夏の夜には無数の星々が見られることからステラ・マレと呼ばれている。

その他

ールキドウス・アルプス・フロース《光り輝く白い花》 ユーフェリア全土に古より伝わる伝承に重畳する聖なる乙女の事。諸説があるものの、一説にはこの光り輝く白い花が創生神ユーフェリアに選ばれた異世界の人物で、その身体のだこかに花の証であるユーフェリアの聖痕があり、嫁ぐ事でその者に莫大な英知と富をもたら

すと言われている。

通貨・物価

通貨は通貨はすべて硬貨であり紙幣通貨は存在しない。黄銅貨、赤銅貨、銅貨、青銅貨、銀貨、金貨、白金貨となっている。交換レートは黄銅貨10枚⇐赤銅貨、赤銅貨10⇐銅貨、銅貨10枚⇐青銅貨、青銅貨20枚⇐銀貨、銀貨50枚⇐金貨、金貨100枚で白金貨となる。諸国、地域により差はあるもののノクティス王国は概ね安定している。両親+子供二人家族の平均収入がおよそ銀貨2枚と青銅貨10枚であることに對し、リンゴ一個が約赤銅貨9枚⇐銅貨1枚。一回の外食が銅貨8枚⇐青銅貨1枚ほどと概ね日本と変わらない。

移動・交通

乗合馬車 ルーナルメン・ウルプス内を循環する庶民の足。王都や大きな町には必ずある。一回の乗車賃が銅貨1枚と安値なことから、大都市に住む庶民には欠かせないものとなっている

長距離馬車 都市や街を繋ぐ馬車。主に冒険者や商人が利用するものの乗合馬車と違い、個人で借りる事が多いため値段は高い。

飛竜車 主に貴族が好んで所有する移動手段。飛竜と呼ばれる小型の竜を飼いならし、客車を引かせている。馬車に比べスピードがかなり早い。

天馬車 貴族や王族がその優雅さから好んで所有する。文字通り天馬に客車を引かせたもの。

登場人物

牙木漣さえぎれん（20） 突然王城に現れた異世界の女性。ユーフェリアに

伝わる伝承になぞらえ王の花嫁として、王城の妃の間に置かれる。艶やかな黒髪と黒曜石のような瞳をした麗人。当初、元の世界に戻りたいと強く望んでいたが、王城の人間と交流を持つうちに迷いが始まる。

アベル・ナイトレイン（25） 異世界ユーフェリアにあるノクテイス王国の若き王。月の光のような銀髪と冬の湖色の瞳の麗人。一見、怜悧な印象を持たせる容姿をしているものの、誰よりも国と民の事を思う賢王。幼い頃から聞き親しんだ物語の登場人物である”次元渡りの少女”の瞳と髪をした漣に心奪われる。

大賢者ジークフリード（？） 時空の流れの中を旅する古の賢者。一説にはノクテイス王家の初代国王であり、創生神ユーフェリアの使いとも言われているが真相は定かではない。漣がユーフェリアに落ちる直前に接触した人物。

プロローグ、的な

その夜、ノクティスの若き国王アベル・ナイトレインは一日の執務を終え、ようやく自室へと戻っていた。遅めの晚餐と湯浴みを終え、ベッドサイドに用意されていた葡萄酒^{ワイン}を軽く煽り、小さなため息を零すとベッドにはいると立ち上がる。が、青年はなんとなく感じた違和感に、ふと敷布にかけていた右手を止める。

ややあつて、何を思ったのか勢いよく敷布を捲り取ると、目の前に映る光景に思わず息をのんだ。国王のベッドの中、膝を抱え小さくなった少女が眠っていたのだ。否、"少女"と呼ぶには些か語弊のある膨らみをもった女が、気持ちよさそうに寝息を立てている。

王宮内の中でも、特に警備の厳しい国王の寝室で堂々と眠る珍妙な格好の女。敵対する国の暗殺者、ないしは自国の利と金銭の事しか考えられぬ馬鹿貴族がよこした娘が夜這いをかけに来たかと思っていただけに、この状態は予想できなかった。

『……………おい』

とりあえず、声をかけては見る物の女が起きる気配はみじんもない。

よくよく見れば、頬に残る涙の跡。

格好からして、他国の者と考えるのが妥当だろう。だが、いくら記憶を反芻してみても、このような着衣を纏う国は思い出せない。友好国にも敵国にも。

さらに、色素の薄そうな象牙色の肌と星を散りばめた夜色の髪とは不思議だ。ユーフェリア大陸に黒い髪の間人は生まれぬ。それは古より、創生神・ユーフェリアの持つ色が黒だからと言い伝えられているからだ。そう、黒は神の色。この世で最も尊い貴色なのだ。

一瞬、幼いころ乳母が寝物語に話してくれた伝承物語が頭をよぎるが、まさかと軽く頭を振る。

頭を軽く振って、寝ている女へと近づいた。ここまで近づいても全く起きる気配がない。

アベルはどうしたものかと、ため息をついてベッドの淵に腰を下ろした。

そうして、無意識に女の髪に手を伸ばす。

触れた夜色の髪がサラサラと指の間を抜ける。初めて触れる上質セーリックムな絹のような質感に、なんとなく唇を寄せかけて、アベルは慌てて身を引く。

『……………おい』

少し強くゆすると女がうつすらと目を開けた。髪とはまた違う、黒曜石の瞳が見えたが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだろうか？

ゆっくりとアベルを見上げると、女は優しげな微笑を一つ零した。

そしてまたコテンとベットのの上に転がってしまう。微笑みを浮かべ、再度眠りについた女を前に一瞬、どうした物かと逡巡したアベルはすぐに結論に達した。

（危険はなさそうだな）

人、二人が寝てまだ十分にスペースはある。暗殺対象の部屋で暢気に寝る暗殺者もないだろうし、貴族のバカ娘でもなさそうだ。そう考え、国王は女の隣に寝転んだ。

銀の青年

目が覚めると見知らぬ人の腕の中にいた。どうせまた従兄が酔っぱらってベッドを間違えたのだと思いそのまま胸にすり寄ると、いつもと何かが違う事に気づいた。

やけに遅しかったのだ。確かに従兄は人に見られるという仕事柄、自分の見た目にはこちらが何もそこまでと思うほど気を使っていた。それ故、ある程度身体を鍛えて余分な肉が付かない様にもしていたが、ここまで遅しかっただろうか？

いや、これはおかしい。明らかにおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、冬の湖色の瞳とぶつかった。驚いているのか、ちよつと瞳が見開き気味だ。月の光のような銀髪と冬の湖色の瞳の、日本人ではない青年。

顔は恐ろしいほど整っている。

なまじ整っているだけに、髪の色や瞳とあいまって少し冷たい印象がある。

感じたほどがっしりと胸板が厚いわけではないが、引き締まった、いわゆるボクサー体型の身体は何か武術でもなっているのだろうか？と、青年の胸に頬を寄せながら自分がちよつと混乱しているこ

とに気がついた。

知らない人の胸にすり寄って、筋肉の確認をする乙女はあまりいいだろう。というか、知らない女にすり寄られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな彼女をただ見ていた。あまり表情は変わらなかったが、なんとなく怒っている雰囲気ではない。

「お、おはようございます?」

『ああ、おはよう』

外国人なのに言葉が通じる。それに、きちんと挨拶は返してくれた。

少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし、彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。

(やっぱり謝るべきかな?)

自分が悪いわけではないのだけでも。考え始めた彼女の横で青年はゆっくりと彼女を抱きしめていた腕を外してベットから上半身

を起こし伸びをした。

しなやかで、優雅な動きだ。やっぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、彼女もあくびをして伸びをした。

（ここ、どこだろう？）

昨日、自分はいつもと変わらない一日をすごしたはずだ。明け方から仕事に向かう従兄を起こし、朝食を食べさせた後、身支度を手伝って玄関で見送った。

その時、従兄が”お前はもう俺の嫁決定だな”と冗談めかして笑ったのを、彼女はちゃんと覚えていた。彼を送り出してからはいつもより随分と早い時間だった事もあり、のんびりと家事をかたづけると、ホッとソファで寛いで簡単な昼食を取った後、特にすることもなくって夕方の買い物まで少しソファでうたたねをしたのだ。

いつ帰るか分からない従兄と自分の夕食の準備をして、風呂を済ませると彼女は早々にベッドに入った。そう、間違いなく3LDKの一般の人が住むにはかなり広めの自室のベッドに確かに潜り込んだはずだ。なのに……

とりあえず、初めて会った人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は漣 冴木と言います」

『レン・サエキ?』

「はい、漣がファーストネームで、冴木がファミリーネームです」

外国人っぽいからこういう名前の紹介をしたがどうやらあってい
たらしい。ちょっとほっとする。

『私はアベル。アベル・ナイトレイン。黄昏の国ノクティスの王だ』

そういつて、彼は漣の黒髪を一房掬い口づけた。

(……………へ?)

一瞬、自分が何をされたのか分からず、彼女は固まる。

『ところで……………』

何かを言いかけた青年の言葉を遮るように、大きな音を立てて扉

が開いた。

『陛下、陛下、陛下……！！！！』

バタバタと足音を響かせて部屋に入ってきたのは、この国の神官長にして貴族の才媛と名高い、フリードリヒ・ウェルネスだった。

『フリードリヒ……うるさいぞ、一度呼べばわかる……』

『し、失礼しました。ですが、陛下……一大事ですぞ！！先ほど——
——あの、その方は？』

薄い水色の髪をゆるく一つに纏め、白を基調に金の縁取りがされ
たまるでローブのような服を纏った中世的な麗貌の青年は、漣を見
て顎が外れそうなほどポカンと口を開けている。

『へ、陛下……その女性……まさかっ！？』

まさか、なんだと言うのだろうか。やけに焦っている水色髪の青年
のマヌケ面がもったいないと思う漣を余所にアベルはふと漣に尋ね
る。

『レン、君は幾つだ？』

『へ？20歳です』

傍目にわかる程、ぎよつとされた事になんともなく傷つくなあと思いつつ、漣はアベルに尋ね返した。

「アベルは幾つなんです？」

「25だが？」

これはこれで驚く。その落ち着いた雰囲気からもう少し年上だと漣は思っていた。そのことが顔に出ていたのか、アベルは一瞬ムツとして言った。

「私は普通だ。レンが胸（むね）以外小さすぎるんだろ？」

「キヤー——、どこ見てるんですか／＼！！？」

銀髪的美貌の青年の視線を胸に感じ、漣は真っ赤になりながら慌てて両腕で胸を隠す。

「別に減るものではあるまいに……」

「そ、そういう問題じゃありません！！男性が女性の胸をそんなマジマジと見ちゃいけません！！」

そんなやり取りを繰り返す二人の下に、先ほどまで茫然としていたフリードリヒがつかつかと歩み寄る。そして、徐にベッドサイドの床に膝をついたかと思うと——

『その御髪の色、瞳の色、”女神の贈り物”とお見受けしました！』

「は？」

フリードリヒの言葉に漣は思わず首を傾けた。

『間違いございません！！あなた様は”女神の贈り物”。陛下の花嫁となり未来の王妃となられるお方にございます！！』
「は、花嫁〜！？」

うわずった声であたふたとフリードリヒから距離をとる。

『……レン？』

「あ、あの、その……えっと」

『おお、こうしてはいられません！！陛下、私はこれで失礼いたします。”女神の贈り物”が降臨されたのですすぐさまこの事実を民にも知らしめねば……ああ、議会での発布も——』
「へ？あ、あのっ」

『まあ、待てフリードリヒ。その話はもう少しレンと話してからだ……』

『は？ですが……………』

忠誠を誓う主の言葉に、フリードリヒは怪訝な表情を見せる。

『お前のいう事が正しいなら彼女は違う世界から来たという事だ。ならば、彼女は女神ユーフェリアの事も、この世界の事も知らないのだ。いきなり花嫁だ、女神の贈り物だと言われても混乱させるだけだ……………そうだな、レン？』

「へ？……………はい」

『とりあえず、何時までも夜着のままにいるわけにもいくまい。フリードリヒ、セシリアとセリーヌを呼んで彼女の世話を……………レン、朝食は何がいい？』

「えっとなんでも……………」

『ふむ、ならば適当に用意しよう。この城の料理長の腕はなかなかの物だぞ』

につこりと柔らかな微笑を浮かべたアベルにレンは思わず頬を赤らめた。その後、アベルの私室に恭しく現れたそっくりな二人の女性に連れられて、漣はアベルの部屋を後にした。

与えられた物

「えっと、じゃあ……私はその女神様にこの世界に落とされたということですか？」

朝食を食べ終わったテーブルで、漣はアベルの話をまとめた。

『端的に言えば……』

「そ、そんなっ、じゃあ帰る方法は——私、困ります!!」

『レ、レン様っ、落ち着かれてください!!これはとても名誉な……』

「そんなのいりません!!家族がいるんですっ、私を待ってる人が!!」

『落ち着くんだ、二人とも……フリードリヒ、お前は熱くなり過ぎだ』

『で、ですが、陛下……』

『お前は少し黙ってる。レン、君の事は分かった……だが、実際問題我々には君を元の世界に返してやるだけの力がないのが現実だ』

そういつて、少しさみしげな微笑を見せたアベルに、漣の胸がチクリと痛む。

「あ……………」

『もちろん、君が家族に会いたい、自分の育った世界に戻りたい気持ちもわかる。だから、こうしてはどうだろう？』

アベルの、国王の提案に漣はジツと耳を傾けた。

『現段階では君を返す手立てはない。だが、私は王命として君を元の世界に返す手段を探させよう。もちろん、確実に帰してやれる保証はないが力は尽くす。それまで、君はここにいて欲しい』
「え？」

『もちろん衣食住についても保障するし、他に欲しい物があれば可能な限り用意しよう。その代り、君の世界の事を教えて欲しいのだ』
「私の、世界の事？」

『ああ、我々にとって未知の、見たこともない世界だ。何かの役に立つかもしれない』

そういつて、アベルは淡い微笑を浮かべた。それは、彼女にとって願ってもない申し出にも思えた。右も左も分からない世界に何の前触れもなく放り出され、この世界の常識も、生きていく術もない

のだ。ここで、彼の申し出を断つても自分は野垂れ死にするしかない事ぐらい、彼女にも分かっていた。

「分かりました。しばらくお世話になります」

ペコリと頭を下げてそう言った漣にアベルは優しい微笑を浮かべる。その後、セシリアに連れられた漣が退室するのを見届けて、アベルはフリードリヒに向き直る。

『何か言いたいことがありそうだな？』

『……は、僭越ながら……宜しいのですか、あのようなお約束をなさつても？』

『ああ、どうせ彼女には真実は分かるまい。それに、ようやく手に入れた”女神の贈り物”をそうやすやすと手放せるものか……』
『はあ、しかし万が一レン様がお知りになったら……』

『案ずるな、この話を知っているのは私たち二人とセシリアだけだ。お前はもちろんセシリアも他言することはあるまい』

『それは、もちろんでございますが……』

言いかけたフリードリヒにこの話の続きをするつもりはないのか、アベルは背を向けて窓の下に広がる庭園を眺めた。

『では、私はこれで……』

仕方なくアベルの背に深々と腰を折ったフリードリヒに声がかかる。

『フリードリヒ』

『はい?』

『彼女に部屋を与えてくれ』

『ええ、それはもちろん』

『青玉の間を……』

恭しい礼をしながらアベルの言葉を聞いていたフリードリヒは思わず目を丸める。

『陛下、しかしそれは……』

『青玉の間だ』

『……かしこまりました』

再度、深く礼を取り今度こそフリードリヒは退室した。

一人になった室内で、アベルはひそやかにため息をつくのだった。

三日目の朝

「おはようございます、レン様。今日はとてもいいお天気ですわ」
「おはようございます、セシリアさん。いいお天気って、何か違いがあるんですか？」

この城に落とされて三日目の朝、漣はこの城——いや、この国自体が普通とは少し違う事によく気付いた。彼女が与えられた部屋の大きな窓から望む野外は、夜はもちろん朝も昼も常に暗く、太陽が昇る事は愚か、青空が頭上に広がることがないのだ。

普通なら一日の始まりを告げる朝日が上る時間でも外は昏く、まるで日の入りのような光景が広がっている。おそらく、この城のある場所自体が常に極夜のような土地なのだろう。こうなると、いろいろな心配事があるような気もしたが、この世界ではそんな心配もないようだった。

驚いた事にこの世界では、元の世界で言ういわゆる”魔法”のよきな物が存在しているのだ。この世界の住人の体内には個人差があるものの魔力というものが存在し、極一般的な魔力を持ったものなら普通の生活にはなんら不便を感じないらしい。事実、この城の中でも魔法はふんだんに使われている。城の至るところを明るく照らすライト然り、朝昼晩と給仕される食事の調理然り、また城にいるものの全てが使用する水回り然りだ。

「ええ、それはもう……今朝はルナがあんなに大きくてアストラムより輝いていますわ」

「……わあ、本当……お月様があんなに大きい……」

「そうでございましょう？ああ、私としたことがすっかり忘れていましたわ。レン様、先ほど陛下よりお文がまいりまして、朝食を一緒にいかがですかとの事です」

「王様が……分かりました、是非一緒に伝えてください？」

「かしこまりました。ではお召し物はいかがなさいますか？朝食の席ですから、それほど改まった装いは必要ないかと」

「セシリアさんにお任せします。こちらの礼儀はまだわかりませんから」

少し恥じらいつつそう言った漣に、セシリアはにっこりと笑顔を向ける。

「よろこんでお手伝いいたしますわ」

「ありがとう、セシリアさん」

衣裳部屋の戸を開き少しの間の後、セシリアが取り出したのは深い青が美しいシンプルだが質のいいドレスだった。

「こちらはいかがです？青はノクティス王国の王家の色ですし、レン様の御髪の色ともよくあっていますわ」

「王家の色？」

「ええ、レン様も陛下の瞳の色をご覧になりましたでしょ？この青は貴色と言いまして、王家の中でもその直系の方とその伴侶しか纏うことを許されていません。これに陛下の御髪と同じ銀を合わせますと、それは歴代の王にしか許されない色となります」

「へえ……じゃあ、それを私が着るのは………」

「レン様はまた特別ですわ。何しろレン様は創生神であらせられるユーフェリア様の”女神の贈り物”であらせられ、神の色である黒をお持ちですもの」

「は、はは………」

うつとりとした様子で語るセシリアに乾いた笑みを向ける漣。それも無理はない彼女の世界では黒はたいして珍しいものではないし、多少の違いはあれどアジア民族は皆生まれつき黒髪黒瞳なのだから。

「セ、セシリアさん、そろそろ食堂に行った方がいいんじゃないですか？あまり遅くなると——」

「あ、あら、私とした事が……ではレン様こちらのドレスでよろしいですか？」

すっかり醜態をさらしてしまったセシリアは、僅かに頬を染め漣に尋ねる。それに小さく頷いて、着替えを助けられながら、漣はドレスを纏うのだった。

王様という人

『失礼いたします、陛下。レン様がお見えになりました』

『ああ、入室を……』

”緑柱の食堂”と呼ばれる淡い緑と青が混じったような色で占められた室内で、すでにテーブルについていたアベルに向かいフリードリヒが告げる。

「おはようございます、王様。朝食にご招待いただきありがとうございます」

ややあつて、食堂に現れた漣の姿にアベルは優しげな微笑を浮かべる。

『急な招待で申し訳ない。まずは座ってくれ』
「失礼します」

アベル自ら、漣の手を取りエスコートを買って出るとアベルは自分の席の向かいを彼女に勧めた。紳士らしく椅子を引いてやり、漣

が着席したのを確認すると部屋の隅に立っていた給仕たちに視線で食事を出すよう促す。

『こちらから滞在を望んでおいて、中々会いに行けず申し訳ない。何か不自由な事はないかな?』

「いいえ、セシリアさんも他の侍女の方たちも、とてもよくしてくださっていますから不自由はありません。御心遣い感謝します、王様」

給仕たちの手により続々と運ばれてくる料理の数々に、微かに目を丸めながらも漣はアベルに礼を述べる。

『そうか、それならばいいのだが……何かあれば遠慮せずに言っ
て欲しい。レンは私の客人なのだから……物でなくともやりたいこと
でもいいんだぞ?』

「……やりたいことなら、一つだけあります」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9970y/>

睡蓮の花

2011年12月7日08時52分発行